

(別紙)

『唐津市における水産業の取り組みについて』

日 時 令和4年5月18日(水)

視察地 唐津市水産業活性化支援センター

視察者 水野孝典、和田正幸 以上2名

視察内容

I 唐津市の概要



支援センターで説明を受ける



水産業活性化支援センター前で



研究室の様子

唐津市は、佐賀県の西北部に位置し、北部は玄界灘に、東部は糸島市、佐賀市などに、西部は玄海町、伊万里湾を隔てて松浦市と、また南部は武雄市などに接する。

総面積は487.60 km²で、美しく変化に富んだ自然と大陸との古い交流の歴史を背景に、農林水産業をはじめとする産業や、伝統的な地域文化が育まれ、観光地としても発展してきている。主な名所には「虹の松原」があり、日本三大松原に数えられる。

人口は令和4年4月1日現在で117,789人である。65歳以上の高齢化率は32.9%。

II 調査研修テーマ『唐津市の水産業』：唐津市水産業活性化支援センター

1 視察の目的

京丹後市における農林水産業の一環である水産業の、今後の振興発展のため、唐津市で新たな施策として取り組んでいる「マサバ」の栽培漁業を研修することにした。本市議会産業建設委員会では、以前、「活イカ」の取り組みについて唐津市を視察した経過がある。今後においては、捕獲漁業のみでなく、栽培漁業の手法も必要ではないかとの仮説からの視察研修である。

2 取り組みの概要(マサバ、その他の水産業の振興策)

(1) 唐津市の水産業

唐津市はリアス式海岸で、漁場は対馬暖流の影響下にある壱岐水道の外洋性漁場と、唐津湾の内湾性漁場があり、漁獲の対象となる種類は多く、好漁場を形成している。

主な漁業はタイ、ブリ、イサキ等の高級魚を対象とする釣り、延縄、小型底引き網、船引網、中小型まき網漁業等、外縁域では大中型まき網、イカ釣り、アマダイ延縄等、内湾の漁場では唐津湾でクルマエビ、カキ等の養殖を行っている。

(2) 水産業の課題

唐津市水産業の課題としては、主にふたつある。

ひとつは漁業者の減少で、平成20年度の1,207人から、令和3年度には564人と大きく半減している。2点目は、漁獲高の減少であり、唐津港沿岸物市場の取扱量は、平成20年度の約2,500トンから、令和2年度の約1,300トンとこれも半減していることである。

(3) 他の行政分野との連携

こうした現状から、唐津市では他の行政分野との連携事例として、佐賀県玄海地域の水産物の販売力強化と販売促進を図る水産課の活動の一環として、唐津玄海地区水産物消費拡大協議会と連携し、唐津QサバのPRや、お魚まつりを行っている。

(4) 水産業活性化支援センターの取り組み

水産業活性化支援センターは、核燃料サイクル交付金により建設費総額約6億円で建設された。建設期間は平成23年度から26年度。現在の職員体制はセンター長1名、事務職員1名。ここでの事業内容は、唐津Qサバの採卵である。共同研究機関は九州大学(九州大学大学院農学研究院附属アクアバイオリソース創出センター唐津サテライト。令和2年8月から稼働)。

(5) 唐津Qサバの取り組み

マサバは「美味」、「健康によい」などの長所を有する反面、季節性が限られ、鮮度が落ちやすく、寄生虫などによる食中毒の怖れもあり、漁獲も不安定であるなど多くの弱点もある。

唐津市では、完全養殖のマサバ栽培に取り組み、この課題を克服した。

《普通の養殖》 天然稚魚捕獲 ⇒ 養殖

《完全養殖》 種苗生産技術による人工ふ化から稚魚育成を経て、養殖技術による成魚の養成、そして採卵技術による採卵、人工ふ化、へと循環させている。

この結果、完全養殖マサバが従来抱えていた課題や悩みを解消した。

- ① 一年中脂が多く、「周年美味！」
- ② 生きたまま販売で、「高鮮度！」
- ③ 寄生虫(アニサキス)の心配がなく、「安心！」
- ④ 天然魚に頼る必要がなく、「安定供給！」
- ⑤ 抗酸化成分豊富で、「美容に良い！」

※ アニサキス=天然マサバや、天然種苗養殖マサバの腹に普通に見られる寄生虫。オキアミ、魚、イカ、イルカ、クジラ、アザラシなどに寄生し、成長と増殖を繰り返すが、完全養殖ではオキアミ等を食べる機会がないため、寄生虫が存在することがない。

(5) 今後の展開等について

「唐津Qサバ」は平成30年5月に商標登録を完成している。この「唐津Qサバ」を唐津の新名物として唐津を元気にする一助にしたいと考えている。現在、活魚として流通が可能で、寄生虫がなく安心して生食できることで高付加価値を図り、「うまかもん市場」や市内の料理店、旅館などで食することができるが、希少価値となっている。また、加工品としてもアワビとともにしゃぶしゃぶなどとして販路が開発されつつある。

III 所見

唐津市はリアス式海岸で対馬暖流の影響下にある壱岐水道の外洋性漁場と唐津湾の内湾性漁場がある。漁獲の対象となる種類は多く、好漁場である。観光客に一年中水産物を提供できるように、イカの活き造りに続き、全国でも珍しいサバの完全養殖を九州大学との共同研究で、マサバ（唐津Qサバ）を平成30年5月に登録完了した。京丹後市も久美浜湾でカキ、トリガイの養殖をしている。さらに他の魚種でも栽培漁業の道を探るべきではないだろうか。

また、観光立市を標榜している本市として、観光事業と漁業の連携施策も模索し、年間を通じた海産物をPRすべきである。観光振興施策のなかに、さらに水産業を位置づけ、食の魅力を発信していくべきである。

『対馬市における国境の島、離島としての観光振興について』

日 時 令和4年5月19日（木）

視察地 対馬市役所

視察者 水野孝典、和田正幸 以上2名

視察内容

I 対馬市の概要



対馬市議会議場



対馬市役所前



観光施策について説明を受ける

対馬市は平成16年3月1日に6町が誕生した1島1市のまち。6町は、厳原町、美津島町、豊玉町、峰町、上県町、上対馬町。面積は、707.42 km²、日本で3番目に大きい島。世帯数14,661、人口は28,510人。高齢化率39.3%。合計特殊出生率は2.18で全国5位。面積の約9割が山地。南北82キロ、東西18キロ。海岸延長915 km。6つの

有人島と 102 の無人島からなる。

また、福岡までの海路は、138 km、韓国までは 49.5 km であり、韓国のほうが地理的には近い。対馬の北端からは、プサンの夜景、またプサン市の花火が見えるという。

産業別就業者数をみると、第一次産業が 19.9% で高く、このうち漁業が 77.4% を占めるなど、対馬では漁業が主要な産業となっている。これに対して、第二次は 13.1%、第三次は 66.9% で、長崎県平均を下回る。また、すべての産業分野で平成 2 年から 27 年の四半世紀の間に、産業別就業者数は半減している。

II 調査研修テーマ『対馬市における国境の島、離島としての観光振興について』

：対馬市役所

1 視察の目的

京丹後市は豊かな自然や歴史を背景として「観光立市」を標榜し、観光振興は本市の主要産業となっている。こうしたなか、国境の島であり、また離島でもある長崎県の対馬市の観光施策を視察研修し、観光振興を図るうえで共通する課題や、独自の課題を探り、今後における本市の観光振興に資する目的で対馬市を選択した。特に対馬市は、韓国とも近く、また朝鮮通信使などを通じて歴史的なつながりも深く、本市が特に古代に朝鮮半島やアジア大陸と交流があったこと、また、コロナ後のインバウンド再開にも備えているところから、大きなヒントが得られるのではないかと仮説からの視察研修である。加えて、対馬市では令和 4 年 3 月に「対馬市観光振興推進計画」をリニューアルしており、最新の取り組みについても学ぶことができるのではないかと考えた。

2 観光振興の現状

対馬への内外の旅行者は、平成 30 年度のおよそ 130 万人をピークに、その後は日韓関係の悪化やコロナ禍等の影響により、令和 3 年度には 30 万人へ大きく減少している。

また、このうち国際線を利用した対馬への入込客では、韓国人観光客が 99% を占めている。この入込客数は、平成 24 年度のおよそ 15 万人から急伸し、平成 30 年度にはおよそ 41 万人余とピークを見せた。しかし、日本人観光客同様、翌年から急減し、令和 2 年度には 2 万人程度へ激減している。

対馬には観光資源として、歴史、文化、自然、景観など多岐にわたるものがあふれている。

それらの観光資源のうち、主なものは以下のとおりである。

《歴史》遣隋使・遣唐使・遣新羅使（600 年～700 年頃）

白村江の戦い（663 年 唐・新羅と百済復興の戦い）

元寇（1274・1281 年 モンゴル・高麗の襲来）

秀吉の朝鮮出兵（1592 年、1597 年 小西行長と先鋒隊）

朝鮮通信使（1607 年～1811 年 交渉と案内役）

《文化》大陸文化と日本文化の中継地（漢字、佛教、稲作、神社、渡来佛、そば等、サツマイモ、唐辛子）

習俗・年中行事（亀ト、赤米頭受け、盆踊り、亥の子等）

方言（対馬独特の方言、韓国語が方言になったもの等）

《自然・景観》動植物 ツシマヤマネコ、ツシマジカ、対馬馬、ツシマテン等
植物 ヒトツバダゴ、ハクレンキスゲ、ダンギク等

《山岳》最高峰 矢立山（648.4m）

原始林・原生林 白嶽、龍良山、御嶽

《景観》浅茅湾、豆酩崎、鮎戻し自然公園等

《その他の見どころ》万松院、金田城、和多都美神社、武家屋敷、砲台跡（姫神山）、
万関橋、韓国展望所、烏帽子岳展望所、体験メニュー（そば打ち、シーカ
ヤック、キャンプ、釣り、トレッキング、若田硯石）

《特産品・食》アナゴ、アカムツ（ノドグロ）、マグロ、スルメ、サバ、サザエ、アワ
ビ、ウニ、真珠、シイタケ、対州そば、はちみつ等

《郷土料理・お土産》とんちゃん、いりやき、石焼き、ろくべえ、かすまき、センダ
ンゴ、佐賀のたいやき

平成 21 年に福岡事務所開設、

平成 25 年に「よりあい処つしま」オープン。これは、福岡や九州北部に向けた対馬
の情報発信、ファン獲得事業、アンテナショップの役割を担っている。

3 観光振興の課題

このように観光資源としては、実に豊富なものがそろっている対馬である。しかし、
以下、さまざまな課題があることが指摘されている。

- 島民が対馬の良さ、魅力に気づいていない
- 国内観光客が少ない
- 対馬の認知度が低い
- 交通費（航空運賃）が高い
- 島の恵み（特に鮮魚、活魚）が島内で流通する機会が少ない
- 人口減少により産業の停滞化
- 国外観光客の増加による受け入れ態勢が不十分（宿泊施設、ガイド等の不足）
- 島内交通、飲食、宿泊施設等受け入れ態勢が不十分
- 外国人観光客のマナーの問題

これらを整理すると、以下のようになる。

- (1) 観光ニーズが変わっても観光の内容・質が変わっていない。
- (2) 対馬の“強み”が“期待（＝観光目的）”になっていない。
- (3) 他の島と比較した対馬観光・ブランドイメージの欠如。
- (4) 誰を観光のターゲットにするか、明確でない。
- (5) “対馬にわざわざ観光に行く”目的・売りが欠如。

こうした諸課題の分析から、今後の「対馬観光のコンセプト」として、観光振興推進プランを作成し、次の新たな方針を掲げている。

- (1) 観光定義＝対馬市の観光の再定義・裾野拡大
- (2) 立ち位置＝対馬の強みを最大限に生かす観光ポジショニングの設定
- (3) 観光目的＝対馬の売り＝尖った観光コンテンツの創出
- (4) ターゲット＝コアなファンづくりによる持続可能な観光へのシフト
- (5) 事業者支援＝事業者のニーズに沿った段階的な支援

3 所見

対馬の暮らしには、わずかの滞在期間であったが、一言で言えば厳しさを感じた。第一次産業が主力で、これに自然、歴史など立地上の特色を生かした観光産業があるが、残念ながら対馬の魅力が十分発信されているとは言えないように感じた。観光資源が豊富に存在するにもかかわらずである。島民自身が自分たちの島や市の特色をよく知らないという職員の説明からは、本市においても同様の状況で、まず市民自身が自分のまちの特色、魅力を知ることから始めなくてはならないと感じた。

対馬は離島であり、九州の福岡よりも隣国である韓国のほうが距離的に近く、観光も韓国人入込客に多くを期待してきた過去がある。しかし、これも日韓関係が悪化すれば、たちまち交流が途絶え、対馬の経済に大きな悪影響を及ぼす。本市でも、インバウンドに多くを期待しているが、このたびのコロナ禍など思わぬ事態が生ずれば、たちまち門戸は閉ざされ外国からの観光客は途絶える。ともに脆弱な構造を抱えているわけだが、まずはやはり日本人観光客を安定的に受け入れる施策、そのための観光資源の整備と魅力向上が欠かせない。

対馬でも韓国からの観光客はコロナ禍で激減し、国内からの観光客も減少している。対馬と京丹後市の共通のもうひとつの課題、問題点は人口減少問題への対応である。対馬でも高齢化率が39.3%と高い。このまま人口減少と高齢化が進めば、対馬で集落を維持することができるだろうか。若年層をいかに地元に残すか。雇用対策などに力を入れ、若者たちの集まる場所づくりをしていくことも真剣に考えなければならない。